

主 題：教会における秩序

聖書箇所：コリント人への手紙第一 14章26-40節

私たちはコリント教会のことを学んでいます。この教会にはいろいろな問題がありました。11章の中には、この教会で人々が集まった時、その集まりがそれぞれにとって益となっていなかったという悲しい現実が記されていました。本来なら私たちは神のために生き、隣人のために生きるはずなのに、この教会の人々はみんな自分のことしか考えていなかった。ですから教会の中には分裂が存在していたことが11:17のところから書かれていました。イエス・キリストの救いにあずかったひとりひとりには霊的賜物が与えられているにもかかわらず、彼らはそれを人々の成長のために用いようとしなかった。かえって彼らは自分たちがどんな賜物をどれだけいただいているかによって、自分を自慢するような集団でした。本来なら人々のことを愛するはずなのに、その愛を示していなかった。個人としての信仰の成長も見ることができなかつたでしょうし、教会としてもそうだったはず。大変悲しい教会です。

パウロはそのことを知った上で、この教会のクリスチャンたちに対して、あなたたちが霊的賜物を与えられたのは教会の徳を高めるといふ目的のためだと教え続けてきたのです。そこに集う主イエス・キリストを信じる兄弟姉妹の信仰を成長させるために賜物を用いるのだとパウロは教えました。

A. 霊的賜物の目的 26節

きょうのテキストは14:26からですが、14章に入ってパウロは「預言」がいかに大切かということをお教えしました。なぜそう言ったかということ、「預言」というのは神の真理を伝えることで、その真理によって聞いた者たちの信仰が成長するからです。悲しいことに彼らは「異言」という賜物は自分のために用いていたわけで、教会の成長には役に立っていなかったのです。だからパウロはいかに「預言」の賜物がすばらしいのかを教えてきたのです。

1. 「徳を高める」ため

そしてパウロはここで改めてその賜物の目的について教えています。Iコリント14:26「兄弟たち。では、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。」とあります。この「あなたがたが集まる」というのは、礼拝するために集まるということです。主イエス・キリストを信じた者たちが主を礼拝するために集まった時には「徳を高めるために」すべてのことをするようにとパウロは強調します。なぜかということ、彼らがそれを実践していなかったからです。

この26節のみことばを見ると、今から約2000年ほど前にコリント教会がどんなふうになにに礼拝を捧げていたのかを知ることができます。今のような礼拝の形式が確立されていたわけではありません。この当時、人々が教会に集まった時にこういうことをしていたのだとパウロが記してくれています。まず「集まるときには、それぞれの人が賛美」をしている。そして「教え」をしている、「黙示」をしている、「異言を話し」ている、「解き明かし」をしている。もちろんきっとこれだけではなかったはず。しかし、こういうことがコリント教会の中で行われていたと。

1) 「賛美したり」 エペソ5:19 (コロサイ3:16)

まず「賛美したり」と日本語に訳されていることばは、「詩篇」ということばです。当時、讃美歌があったわけではありませんから、恐らく彼らが集まった時に詩篇を歌うのです。今でもそういう教会が存在するし、これまでもそういう教会が存在していました。パウロはエペソ5:19やコロサイ3:16で、今私たちが見ているのと同じようなことを「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。」(エペソ5:19)と説明しています。パウロはただ神様に「賛美しなさい」と言ったのではなく、「詩と賛美と霊の歌とをもって」と言っています。こういう方法で神を賛美すると言うのです。この「詩」というのは詩篇のことです。最初にもお話ししたように、詩篇を歌っている教会は今も存在しています。詩篇には神様の偉大さについて記しています。ですから詩篇を歌う時に、そこに記されている偉大な神のご性質、またその神ご自身のみわざを覚えて、人々は賛美をするのです。次に「賛美」というのは旧約以外の神様のみことばです。恐らく新約聖書を通して、彼らは神様の真理を賛美していた。そして最後の「霊の歌」というのは、聖書を歌うのではなくて、聖霊なる神様によって生み出されていく証しの歌です。今私たちが讃美歌や聖歌やゴスペルを見た時に、この三つのカテゴリーの中に入ってきます。ある曲は讃美歌でも本当に神様の真理だけを歌っている。またある曲はこの神によって救われた者たちが、その救いのすばらしさ、神の偉大さを歌っている。確かに賛美の種類は違っても、神の偉大さを覚え、神をほめたたたえたり、神様によってなされたみわざを心からたたえている、そういう賛美をもって今から約2000年前も人々は賛美していた。そして今も私たちは同じように神様の偉大さを

覚えて賛美をするのです。

2) 「教えたり」

また「教えたり」と出てきますが、恐らくこれは信仰の基礎のところ、教理の部分を教えていたと言われる。なぜイエス・キリストだけが救い主だと言えるのかとか、なぜ聖書だけが神のみことばだと言えるのかと皆さんもいろいろな質問をお受けになるとと思いますが、私たちが望むのは、それは聖書がこのように教えているからだ、そのような信仰者でありたいですね。いや、教会でそう聞いたからというのでは悲しい話です。我々が何を信じているのか、なぜ信じているのか、そのことを知る必要があります。コリント教会でもそうやってしっかりと基礎は教えられていたと見ることができます。

3) 「黙示をしたり」

三つ目に、「黙示を話し」と書いてあります。「黙示」というのは既に見てきたように、神様の啓示のことです。神が私たちに明らかにしようとされなければ、我々はこの神の真理を知ることはなかった。神が明らかにしてくださったゆえに、我々はそれを知ることになったのです。ここであえてパウロは「黙示を話し」と言っていますが、内容的には啓示と同じことです。人々はその啓示に基づいて神様の真理を語っていたのです。

4) 「異言を話したり」

「異言を話し」ということばが出てきます。これは恍惚状態になって訳のわからないことばを話すというのではなく、明らかに外国のことばであると、我々はそのことを既に見てきました。

5) 「解き明かしたりします」

また「解き明かし」をしているというのは、何を言っているのかわからないから、今で言えば通訳のことです。

そういったことが教会の礼拝の中でなされていたということをパウロは26節で教えています。そしてその上で、「そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい」と言います。つまり自分のためではなく、人々のために、人々の信仰が成長するためにしなさいと改めてここで教えます。

2. 「賜物における秩序」 27-33a節

与えられているすべての賜物を教会の徳が高められるために、信仰者の徳が高められるために用いていきなさいと話した後で、ただし、それを実践する時に秩序が必要だということを教えます。好き勝手にしてはならないということです。

1) 「異言」における秩序 27-28節

27-28節を見ると、異言に関する秩序が記されています。「もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても三人で順番に話すべきで、ひとりでは解き明かしをしなさい。」とあります。もし「異言を話す」のだったら、確かにそのような賜物を与えられていたのです。

もし「異言で話すなら」:

(1) 順番に話すこと

どうしたらいいか、どんな秩序がそこに必要なのかというと、まず順番に話をしていくということです。みんなが一斉に話したら何を言っているのかわからないから、「ふたりか、多くても三人で順番に話す」、パウロは人数さえも言っています。

(2) 解き明かしが必要

そして必ず必要なのは「ひとりでは解き明かしをしなさい」ということです。誰かが外国語で話していたら、誰かがその「解き明かし」、つまりは通訳をしなさいということです。

(3) 解き明かしがないとき

もし、解き明かす人がいない時はどうしたらいいのかというと、28節「もし解き明かす者がだれもいなければ、教会ではだまっていなさい。」と。だれも通訳がないのにひとりで外国語で話しても何の徳にもならないからです。私はこんな話をしたと、自己満足はあるかもしれませんが、それは自分がわかっているだけであって、だれにとっても意味のない、理解できないことばであると。それだったら「だまっていなさい」と。「自分だけで、神に向かって話しなさい。」と。誰も通訳がいなければ、外国語で話すことはあなたの徳になるかもしれないけれども、周りの人々の徳にはならないということです。

2) 「預言」における秩序 29-32節

そして「異言」から「預言」へ話移ってきます。29-32節には「預言」における秩序の話が出てきます。

29節「預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。」とあります。神様の真理を語るのであれば、そこにも秩序が要る。どんな秩序かということ、まず人数は「ふたりか三人」にしなさいと記されています。恐らくそれ以上の人がしたとしたら、聞いている者は大変疲れを覚えるだろうし、たくさんをことを一遍に学んだとしても、みんながそれぞれの実になるかということ、ちょっと疑わしいで

すよね。中国本土の教会に行った時に、週報も何も全くない中で順番にいろんな人が立ってお話する、一体これがいつまで続くのかといった礼拝を行っているところがありました。残念だったのは全く言っている内容がわからない。確かに今もそういった形式をとっているところもあるでしょう。しかし、パウロは、あなたたちが神の真理を話すのであれば、少なくとも人数はふたり、多くても三人にきなさいと教えてくれています。

先ほど「解き明かし」する者が必要だと言ったパウロは、「預言」に関しては「吟味」する者が必要だと29節に記しています。この「吟味」ということばは、「評価する」とか「判断する」、「批判する」ということです。これは否定的な話ではなく、語られているメッセージが本当に聖書のメッセージなのかどうかを判断しなさい、それを評価するよと言っているのです。人々の前で語られる聖書のメッセージが本当に神の教えそのものなのかどうか、それとも語り手が自分の語りたいことをただ語っているにすぎないのかどうかです。語り手が言いたいことをあたかも神のメッセージであるかのように語るということは悲しいことですが、実際に行われているからです。みことばの中にそのことを警告する箇所は幾つもあります。サタンが何を望んでいるかということを考えると、次のことが明確になると思います。神様の真理だけが語られると、それを聞いている者たちは本当ならばそこにあって成長します。サタンにとってそれは一番好ましくない。だから一体何が真理かわからないように、さまざまな偽りをもって人々を混乱へと陥れていくのです。まさに今の我々がニュースを見ているのと同じです。一体何が真理なのかわからない、真理を教えてください。悲しいことに教会の中でもそういったことがなされる、そういう感わしがなされるのだということを我々は知っています。

例えばⅡコリント11：13-14でパウロはこう言います。「こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」と。Ⅰヨハネ4：1には「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。」と書いてあります。「なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」と。「にせ預言者」の話になります。少し前後しますけれども、Ⅱペテロ2：1「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」と言っています。これ以上の説明は必要ありませんよね。みことばは「にせ預言者」、にせ教師たちが出てきてあたかも自分たちが神の真理を語っているかのように行動して人々を感わすことを警告しています。特にキリスト教という名前のついているカルトは、最初、聖書を学ばないかと近づいて来て、できるだけ聖書に近いメッセージをします。でも学び始めるとすぐに彼らは聖書から離れて自分たちの書物を使って、それがあたかも神のことばであるかのように話を進めるのです。必ず聖書以外のものに移行していきます。でも最初の入口のところは聖書なのです。そうしないと、多くのクリスチャンたちはその学びを受けようとしなからず。サタンは巧妙にうそをもたらすのです。人々が真理から外れていくためにです。だから我々ひとりひとりの責任は、聞くメッセージが本当に神の真理を語っているのかどうかをしっかりと吟味することです。どうしたら吟味できるか、後で少し触れますけれども、まず覚えていただきたいのは、教会で語られているメッセージだから、著名な先生が語るメッセージだから、すべて信じたいのだから、そういったことは避けなければいけない。誰が語っていたとしても、あなたや私の責任は、語られているそのみことばが本当にみことばどおりなのか、聖書を正しく語っているのかどうかを常に心にとめてみことばを聞くことです。

もちろんこの責任は語る者についても同じことが言えます。みことばを語る者たちの責任はみことばを正確に人々に伝えていくことです。私たちに託された責任は語りたいことを人々に語るという責任ではありません。私たちの責任は神のメッセージを代弁するに過ぎないのです。だから私たちはおもしろおかしくそのメッセージを語らない。なぜなら神様がそう言っておられないからです。神のメッセージを語る時には、私たちはあくまで神が言っておられることを代弁するのであって、多くの人たちがみことばを聞いて感動されるのは、語り手に対する感動ではなくて、語っている内容であるみことばに感動するのです。なぜならこれは神のことばだからです。ヤコブが3：1で言うように、「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受ける」と。教える者たちはそのことを覚悟しなければいけないということです。私たちは神様のおことばを神のことばとして語る責任があるのです。だから教師は厳しいさばきを受けるのだと警告するのです。皆さんを脅しているわけではないです。そういう賜物が神様から与えられているならば、みことばを教えることです。ただそのみことばを正しく伝えるために努力を怠ってはならないということです。そしてまた、そのみことばを聞く者たちにも大きな責任があって、その教えが主が教えていることかどうかを吟味しなさいとパウロは教えます。

その上で30節「もしも座席に着いている別の人に黙示が与えられたら、先の方は黙りなさい。」とあります。この当時、今と同じようにこうやって席に座っているのです。その中である人に神様から特別な啓示が与えられることがあったのです。この「先の人」というのは、前もって語ることが決まっていた人のことです。先ほどパウロがふたりか三人と言いました。どんなふうに決めていたのかは記していませんが、教会で集まる時に、当然神の真理を語る人が決められていました。きょう私は話をするのだと機会が与えられていた人がいても、座っている人の中の誰かに神様から啓示をいただいたのだったら、あなたは自分のチャンスをその人に譲ってあげなさいと言っているのです。「あなたがたは、みなかわるがわる預言できるのであって、」、今回あなたは真理を語れなかったかもしれないけれども、それでいいのだ、それぞれが神様の真理を語るのだと言うのです。こうして見る時に、神の真理を語る者たちの間にライバル心などありません。信仰歴などもないのです。それぞれが神様の真理を語るということに喜びを覚えているのです。あの人のせいで私の言いたいことが言えなかったなどと思っている人はいないのです。神の真理が語られることを喜ぶのです。

(1)「すべての人が学ぶことができ」 31節

そう教えた後、31節にこう続きます。「あなたがたは、みなかわるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができるのです。」とあります。パウロはもしその人が誰であったとしても、こうして神様からの真理が、啓示が与えられて神の真理を正確に語るのであれば、そこにはすばらしい結果が伴うと言います。その真理を聞いたすべての人がその真理を通して大切なことを学ぶのだと言うのです。

(2)「すべての人が勧めを受けることができるのです」 31節

そして、すべての人がその学びを通して「勧めを受けること」になると言うのです。この「勧めを受ける」というのは慰められる、励まされる、力づけられるという意味です。31節の「勧めを受ける」ということばから14:3の「勧め」ということばが派生したのです。14:3では名詞形で使われていて、31節では動詞形で使われています。いずれにしる慰めをいただくという意味です。つまり神様のことばが語られる時に、神はそれを用いて聞くひとりひとりのうちにすばらしいみわざをなして下さるということです。語る者たちは、例えばきょうはこのメッセージを誰々さんにしようなどと思いながらメッセージを準備するものではありません。もしそうだとしたらこれは大変な間違いであり、恐ろしいことです。私たちは神が何を言われたのかを正確にくみ取ろうとするのです。そしてくみ取った真理を皆さんにお伝えするという責任があるのです。でもそのことをする時に、神が何をなさるかということ、語られる聖書のみことばを通して、聞くひとりひとりのうちにわざをなすのです。ですから私たちはよく「きょう私のためにメッセージされましたか」みたいなコメントを聞きます。それは神がみことばを使って聞くひとりひとりのうちにわざをなすからです。そのみことばを通して、ある人は大変な励ましを得たり、慰めを得たり、力を得たりするのです。そういう主のみわざは皆さんもよくご存じだと思います。ですからパウロは、この「預言」によって、「すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができる」のだと言っているのです。

大切なのは、聞くあなたに大変大きな責任があるということです。語っている人が偉い人だから、この人の話を聞くのではないのです。私たちが聞いているメッセージは偉い、大切なみことばだから聞くのです。私たちが聞きたいのは神様のおことばです。神が何とされているかです。皆さんがみことばを聞く時に、そのような態度をもってみことばを待ち望んでおられますか？その時間が始まったから、何となくそこに座って聞かしていただきましょうか……、そんな態度の人はおられないと思いますけれども、我々にとって大切な態度というのは、神様、あなたの真理を知りたいです、あなたを知りたいです、どうかみことばを祝してこのしもべである私にあなたの真理を教えてくださいと。それに従いますからと。もしそのような態度をもってみことばをお聞きになろうとするならば、必ず神様はあなたの心に働きをなして下さる。だから語る者の責任があると同時に、聞く者にも同様に責任があるということです。講壇に立って、誰が語るかによって聞く、聞かないを判断するのではないのです。神のことばが語られているならば、それが誰であったとして、私たちは喜んで聞こうとするのです。主が語って下さっているのです。

パウロはそのことを教えた後、こんなことを言います。32節「預言者たちの霊は預言者たちに服従するもの」だと。何の話をしているかということ、先ほどの話が続いているのです。座席に座っている人たちの中で神様から特別な黙示、啓示が与えられた。その人が語り、予定していた人がそのチャンスを譲って席に座ります。だからパウロは預言者の霊が私はどうしても語りたいたいと思っても、預言者はその状況を考えて、語るかどうかの判断をします。この状況で何が正しいのか——。もしそれをしなくて、みんなが語りたいたいことを語りたいたい時に語っていたら、全く無秩序になって、そこには混乱しかありません。想像できますよね？いろいろな人がいろいろなところで語っていたら何を言っているかわから

ない。ですからパウロは「預言者たちの霊は預言者たちに服従する」、だから、預言者が私はきょうは語らないと、この人が神様から啓示をいただいたのだからと。こうしてそこに秩序を保つようにという話なのです。なぜなら預言者の霊は、そういう願いは、そういう思いは「預言者たちに服従する」と。

(3)「神が混乱の神ではなく」 31節 ヤコブ3：16

こうして私たちのからださえもちゃんと一致を保つように、教会の中においてもきちんと秩序を保ちなさい。だから33節に「それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だから」と続くのです。「混乱」というのは新約の中に5回しか出てこないのですが、日本語ではその中の2回は「暴動」と訳し、1回は「騒動」と訳しています。そしてここでは「混乱」と訳され、ヤコブ3：16では「秩序の乱れ」と書いてあります。

(4)「平和の神だからです」 31節 使徒2：46-47、4：32、ヤコブ3：14-18

ですから神は秩序を乱すような方ではないと。神は「混乱」をもたらすような方ではない。かえって神は平和をもたらす方、「平和の神」だと言うのです。つまり神様が働いておられるところには混乱がないと言うのです。そこには平和があると。

言っている意味を説明するために、皆さんをもう一回初代教会にお連れします。初代教会がどんな教会だったのか思い出してください。ペンテコステがあつて3000人ほどの人が救いにあずかるのです。大変大きな奇蹟の御業がなされるのですが、当時の様子をルカが記してくれています。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。そして毎日、心一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」(使徒2：44-47)、皆さん、この情景を思い描けます？初代教会にあつて、混乱や争いが存在していたと書かれています？彼らは「心一つにして」いたのです。その後、こんなペテロとヨハネが捕らえられるという出来事がありました。彼らが死者の復活の話をすることによって、男の数だけでも5000人ほどが信仰に導かれるという大変なことが起こったのです。それでそれをおもしろく思わない祭司長や長老たちがペテロとヨハネを捕らえるのです。翌日彼らを釈放するのですが、釈放されたこのふたりは仲間たちの所に行き、そこで起こったことすべてを報告します。これを聞いた人々は神の前に祈るのですが、それはこういう祈りです。

使徒4：24-32

:24 これを聞いた人々はみな、心一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。

:25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。

:26 地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』

:27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らつてこの都に集まり、

:28 あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。

:29 主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。

:30 御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」

:31 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

:32 信じた者の群れは、心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。

今、お読みしたように、この初代教会のクリスチャンの集まりの様子は混乱と争いがあふれていました？彼らは「心と思いを一つにして」いたとあります。つまり、きょうパウロが私たちに教えてくれたように、神というのは混乱の神ではないのです。つまり神様がお働きになる時、そこには混乱が生じないということです。

ジョン・マッカーサー先生はこう言います。「教会の集まりにおける無秩序、混乱、不一致、論争は神の御霊がコントロールしておられないことの証拠である」と。「聖霊が支配されているところでは、常に平和がある」と。今それを我々は実際に見たのです。初代教会はそうだったのです。でもコリント教会には分裂が存在したのです。いろいろな混乱が存在したのです。私たちは自分自身だけではなくて自分たちの属する群れをこのみことばに照らし合わせてみる必要があります。私たちがいつも考えなければいけないのは、自分自身が神の前に喜ばれるかどうかだけではなく、私たちの群れが神の前に喜ばれているかどうかです。みことばが私たちに教えるのは、主が支配されているところには平和があるということです。

3. 「教会における秩序」 33b-36節 Iテモテ2:11-13

このことを語ったパウロは賜物から人へと話を進めて行きます。33節後半から教会における秩序の話です。特に既婚の女性たちの話が出ています。「聖徒たちのすべての教会で行なわれているように、教会では、妻たちは黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません。」と書かれています。あえて33節の後半から見ているのはなぜかという、この教えはコリント教会オンリーに対する教えではないからです。「聖徒たちのすべての教会で行なわれている」こと、つまりすべての教会において、この教えが適応されるべきだということをパウロは言うのです。ではすべての教会は何を守るべきなのかという、「妻たちは黙っていなさい」、「語ることを許されていません」、このメッセージを聞くと、我々は当然パウロは何の話をしているのだろうと思います。教会では妻たちはどんな発言も一切してはならないということ、それを彼が命じているのかどうかです。結論を言うと、パウロはそんなことを言いたいわけではありません。皆さん、私たちがみことばを解釈しようとする時に一番必要なのは、その文脈から解釈することです。この手紙を受け取ったコリント教会の人々がこの内容を読んだ時にそこから何をくみ取ったのかです。1節だけ取ってこうだ、ああだとそこに肉をつけることは大変危険なことです。だから私たちはこの文脈は何を話しているかを見るのです。

もう既に見てきたように、ここで話されているのは「預言」の話です。つまり教会の中において神様の真理を語るという話です。すべての人にできるのですが、教会においてはその働きは男性に託されているということです。パウロは同じようなことを別の箇所で言っています。「女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。」、Iテモテ2:11-12です。彼が言ったことは女が教えたり、男を支配したりすることです。つまり女性が男性を教えたり、支配することは正しくないのだとパウロは言ったのです。

その後続けて見ていただくと、今私がお読みしたのはIテモテ2:11-12ですが、13節に「アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。」と続きます。少し奇異に感じませんか？女性が教えたり、男性を支配することを許さないと言って、突然話がアダムとエバの話に飛ぶのです。当然なぜパウロはアダムとエバを引き合いに出すのだろう、なぜこれがここに必要なのだろうと思います。しかし、必要だからパウロはこうやって書いたのです。

きょうのテキストを見ると、「教会では、妻たちは黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません。」、その後「律法も言うように、服従しなさい。」と律法の話になります。多くの皆さんは「律法」と聞いたらモーセの十戒を思うかもしれない。でも「律法」というのはモーセが書いた五書です。創・出・レビ・民・申命記、トールとよばれているモーセ五書が律法なのです。パウロは、実はモーセ五書も教えているように「服従しなさい」と言ったのです。そのモーセ五書の中に何が教えられているのかという、創世記3:16でアダムとエバがエデンの園を追放されて、彼らは新しい皮の衣を着て出て行くのです。その前に神がアダム、男に対して、エバ、女に対して、そして蛇に対して教えをしました。その中で女に対してこういう教えがなされたことを皆さんよく覚えておられると思います。「わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで」子を産まなければならない。「しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」（新改訳第三版）と。神が人をお造りになった時にまず造られたのは男性、アダムでした。そして動物が造られたのですが、アダムにはふさわしい助け手がいなかった。そこで神はアダムの助け手としてエバ、女性を造ったのです。この目的をもって神は男女を造ったのです。創世記3:16が教えることは、悲しいことに、人が罪を犯すことによって神様の教えに背く結果がもたらされるということです。夫婦の間でどっちがリーダーになるかという争いが起こるということです。なぜ私が従わなければいけないのだろう、私の方が教育を受けているし、私の方が決断力がある。もちろんそうかもしれない。でもみことばが教えるのは、創造においてそれぞれに異なった役割があるのです。男性にはリーダーシップをとるという役割があり、女性にはそれをサポートするという役割があるのです。でも悲しいことに罪によってそれが壊れてしまったのです。ですから創世記3:16では、お互いどちらがリーダーシップを発揮するのか、どちらが上に立つのかで争いが起こる話をしたのです。

そうやってすべてのことを見る時に、パウロがIコリント14章で教えたかったことは、教会に来た女性たちがそこで一切ことばを発してはならないと言っているのではないのです。あくまでこれは真理を伝える、男性たちを教えるということに対して、それをしてはならないと。なぜならば律法が教えていると。男性の造られた目的、その役割。女性が造られた目的、その役割。それをしっかり遵守しなさいと。女性たちは男性たちのリーダーシップに従い、それをサポートする。だから彼らを教えるようなことをしてはならないのだと教えているのです。

パウロはこのIコリント11:2から女性の被り物について話した時も同じことを言っていました。彼が伝えたかったことは、今我々が見ていることと同じことです。リーダーシップを発揮すべき男性

に対してそれをサポートするのだと。その見える形だということを既に学んできました。パウロが言うのはもし何かを学びたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは妻にとってはふさわしくないことと。男性の教師たちがそうやって教えている時に、その場でいろいろな質問をしたり、議論をしようとするのはふさわしくない。もし何かあれば家に帰ってあなたの夫に聞きなさいと。独身の方もおられるので、その場合はその教会のリーダーたちにそれを聞きなさいと。「妻にとってはふさわしくないことと」と語っています。聖書の欄外のところにも「恥ずべき」と書いてあります。確かにそういう意味を持ったことばがここでは使われています。ですから質問があれば、家に帰って、またその時間が終わって、別の時間にそのことをしなさいと言うのです。

パウロはこの箇所です。その当時の女性を侮っていた社会、女性を軽視し見下していた社会を教えようとしたのではないのです。もちろん私たちがもう知っているように、神の前にすべて平等なのです。繰り返しますが、与えられた役割が違うのです。ですから今の社会の習わしに従って生きていきなさいではなくて、神が言われることに従いなさい、それが神のメッセージだったのです。それぞれに与えられた役割をしっかりと果たしていきなさいと。

4. 最後に 36-40節

1) 神のことばに従う Iコリント2:15

そして、最後に36-40節に今までパウロ自身が話してきたことをこんなふうにもまとめています。36節「神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいはまた、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。」と言います。パウロは神のことばに従うようにと言うのです。36-38節を見た時に、パウロは非常にきつい口調で自分が神から召された使徒であること、そして彼自身が語っているメッセージが神からのメッセージだということを強調します。なぜかというと、パウロの教えに対して、そんな教えは聞かなくていいという人たちがいたからです。あたかも自分たちが神様からのメッセージをもらったかのように、自分たちが使徒であるかのような、そういうふうにはパウロに対してとるべき態度をとっていない人たちがいたのです。ですからパウロはその人たちに対して、あなたたちだけが真理を知っていると言うのですかと言ったのです。そういう考えをしている人たちに、パウロは彼の記したメッセージこそが神様のみことばであるということを強調するのです。37節「自分を預言者、あるいは、御霊の人と思う者は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。」とあります。この「御霊の人」というのは神の霊によって満たされている人です。神が支配している人、また本当の預言者。その人は「私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい」と。つまりパウロが記したことは、彼自身のメッセージではなくて神のメッセージ、神の命令だと認めるように言うのです。

聞いている者たちの責任とは何かというと、語られているメッセージが本当に神のメッセージかどうかを吟味することです。どうしたらいいかということ、皆さんがいただいている聖霊なる神様にすべてを明け渡しながら歩んでいるならば、その聖霊自身があなたに問いかけてくれる。Iコリント2:15に「御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえ」とあります。もう既に学びましたけれども、「わきまえ」というのは「判断する」ということです。だから聖霊なる神様を宿している皆さん、聖霊が内住している皆さん、聖霊があなたを支配しているならば、語られているメッセージが本当に神から出ているのか、それとも人間の勝手な考えなのかを内住する聖霊が明らかにしてくれる。同時に必要なことは、語られているメッセージとこの当時存在していた聖書、旧約聖書とを照らし合わせることです。今の私たちも誰かのメッセージを聞く時に、本当に聖書と一致したことを言っているかどうか、そのメッセージの信憑性をはかるのです。神が本当にそう言っておられるのかどうかです。ベレヤという町のクリスチャンたちは、パウロが語ったメッセージに対して「非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」と、使徒17:11に出てきます。このクリスチャンたちは、大先生パウロの語ったことだから全部真実だと思って、すべてを受け入れようとしたのではないのです。神を愛するゆえに熱心にみことばを聞きながら、本当に聖書の言っていることかどうかを毎日旧約聖書を調べたということです。みことばが本当に正しいかどうかを判断するためには、ひとりひとりが御霊に満たされ続けることが必要だし、同時に聖書からその教えが矛盾のないものかどうかをはかることが必要だということです。

その上でパウロはこう言っています。パウロの語ったメッセージが「主の命令であることを認めなさい。もしそれを認めないなら、その人は認められません。」と38節に続きます。パウロが記したことが神のメッセージだと認めない人は「認められません」と、同じことばが後半は受け身で書かれています。神がその人を認めないということです。パウロが語った神様からの啓示、真理をそれは神からではないと認めない人たちは、神がその人たちを本物の預言者とは認めない、霊的な使徒であると認めないと言うのです。

2) 秩序をもって行う マタイ16:24 (マルコ8:34、ルカ9:23)

そして最後にもう一度賜物について秩序をもって行いなさいと39-40節で言います。「それゆえ、わたしの兄弟たち。預言することを熱心に求めなさい。異言を話すことも禁じてはいけません。」、すべてのことを教会の徳を高めるためにしていきなさいと。パウロはここを見ても「異言」ということを否定していません。その当時「異言」は確かに存在したのです。それも神様が与えてくださった賜物だということをパウロは知っていたからです。だからパウロはそれを否定するのではない。ただそこにちゃんと秩序を保てと言うのです。すべてのことを教会の兄弟姉妹の益を高めるために、信仰を成長させる目的で使いなさいと。

そう語ったパウロは最後にこう言います。40節「ただ、すべてのことを適切に、秩序をもって行ないなさい。」と。我々が覚えなければいけないのは、何のために神はこの賜物を下さったのか、神は私たちを通して何をなそうとされているのか。教会の中に秩序が必要なのだと。これを見ていると、結局主がパウロを通して教えようとしていることは、自分を捨てるかどうかです。主イエス・キリストが人々を救いに招かれた時に言われたことは、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」でした。「自分を捨て」ということばは確かに「否認する」とか「自分を忘れる」、「無視する」、「自分と縁を切る」という意味もあります。私はもうそういう生き方をしないと、これまでの自己中心的な自分、自分勝手な自分、神を無視した生き方への決別です。私たちはそう決心をしてイエス様に従う、つまり信じる決心をしていくのですが、残念ながら肉は今までの自分中心の生き方を継続させようとするのです。神よりも自分を優先する。隣人のことよりも自分のことを優先する。そうすると、いろいろな問題が出てきます。なぜなら結局そこに問題があるからです。我々が自分のことを捨てて、神のことだけ、神に喜ばれることだけを考えて生きていたらどうなると思います？個人も変わるだろうし、群れも変わると思います。もし自分のことよりもみんなが成長することだけを考えてひとりひとりが生きてらどうだと思いませんか？少なくとも我々の口から不満や不平が出てこないと思いませんか？

なぜならそういうことばが出てくるのは、まだ自分が中心に置かれているからです。私は自分にふさわしい扱いをみんなから受けていない、私はもっとみんなから愛されるべきなのにみんなからその愛をいただけていないと。我々が決心したことは、「自分を捨て」ることだったのです。自己中心的な、自分のことしか考えない、自分を最優先する、そういう生き方から私たちは決別したのです。神を優先して、この方が喜ばれる生き方をしていこうと。そして私たちは隣人を自分と同じように愛して、自分のことよりも隣人の成長のために生きていくことを選択したのです。でも悲しいことに、それを忘れてしまうのです。肉が欲する生き方を私たちは容認してしまうのです。パウロは我々にこの救いにあずかったあなたは何のために生きているのか、誰のために生きているのか、それを思い出してそのように歩みなさいと教えてくれます。私たちは神のために生き、そして私たちの愛する兄弟姉妹たちの成長のために生きているのです。そこに自分はないのです。それがクリスチャンなのです。それが救われた私たちなのです。

そのように歩んでおられる多くの信仰者の皆さん、ぜひそのように歩み続けてください。もしそうでなかったら、きょうからその歩みをするのです。なぜならそれが私たちに対する神の命令だからです。主のみこころに従いながら、主の栄光を現していく。それが救われた私たちの生き方です。そのように生きていきましょう。